

# 「第14回平和リレー講座」の証言から

今回体験を伺った中から「朝鮮農耕勤務隊」と「捕虜収容」のことを紹介します。

## I 浄厳寺と戦争

住職 阿部 俊哲(しゅんてつ)さん 82歳 御船町在住

(「謎の農耕勤務隊」の証言者のお一人 P.35)



### 1. 農耕勤務隊のこと

#### (1)お寺の本堂で寝泊り

彼らがやってきたのは、昭和20年の2月か3月か4月か。同年代より少し上に思われた。寺の前の市道脇に竹やぶがあり、そこにドラム缶を3つくらい並べて風呂に入っていた。丸裸の姿がよく見えて、体毛が薄いなどと友人たちと話したことが印象に残っている。お寺の本堂に寝泊りしていた。本堂の広さは今と同じで40畳あり、1人に1畳あるかないかの狭い中で一杯だった。彼らが来ることを突然知らされた私達家族は、大慌てで4畳半と6畳間に一家6人が移動した。

#### (2)農耕勤務隊の生活

農耕隊の食事は自分達でしていた。ごんぼ剣を下げた日本兵に監視されながら。場所は現在の寺のトイレ付近の仮小屋で行なわれていた。

彼らの作業は、最初のころは松の木の根の油取り。掘りつくすとさつまいもを植えていた。(秘密にされていたのでわからなかったが下士官から聞いた。)この寺にいた農耕隊は毎日御船町の南部、平戸橋、申原、桜台、滝方面へ行っていた。今の運動公園付近でチョマ栽培が行われていた。松の木から採れた油で飛行機が飛ぶのかと、不思議に思った。整備の仕事でガソリンで汚れ落としをやっていたので、飛行機はオクタン価が70とか80よりもっと高い燃料のはず。

#### (3)松の木に縛りつけ

農耕隊への体罰は何度も見た。日本帝国主義を罵倒する若者などは、寺の中にある太い松の木に縛られ青竹でたたかれうなだれるまで続いた。(当時の松は枯れて今のは2代目の松) 志願して日本へ来た人もいたかもしれないが、多くは強引に連れてこられた。(個人的見解)今の拉致問題と重なる。



### 2. 戦前・戦後の御船地区

#### (1)耐火煉瓦工場と鉱山

御船には朝鮮から来た森本仙太郎さんが、溶鉱炉に使う耐火煉瓦の原料となる粘土を掘る工場と鉱山を持っていた。日本坩堝(ルツボ)が先行していて、江尻鉱山などもあった。

終戦前から人夫を集めていて、中国地方や瀬戸方面から来た朝鮮人も多くいた。鉱山の粘土を掘りつくしたので、戦後多くの労働者は帰国した。

#### (2)檀家には朝鮮の人が多い

戦後、帰国せず住み着いた朝鮮の人も多く、北・南を問わず葬儀をした。戦後、教員になって西広瀬小学校に勤め、朝鮮人の家庭も訪問した。(そのため依頼されやすかった?)彼らは儒教(朱子学)文化の影響を受けているので、仏教の葬儀のしきたりを知らないため戸惑うこともあったが。私の寺を「朝鮮寺」と呼ぶ人もいる。檀家の10分の1くらいは朝鮮の人である。

#### (3)浄厳寺の観音像に戦没者の記銘

観音像は昭和45年6月建立。日清戦争・日露戦争・太平洋戦争の戦没者40名が像の裏側に記されている。



#### (4) 梵鐘の供出

戦争中に金属が不足しているため、寺の梵鐘を供出させられた。  
今の梵鐘は、昭和21年の春に檀家の協力で再建したもの。

## II. 農耕勤務隊とわたしの生活

### I. Tさん

79歳 御船町在住（「謎の農耕勤務隊」の証言者のお一人）

#### 1. 農耕勤務隊員の暮らし

##### ①泣き声がよく聞こえた

郷（御船の地区名）の公会堂で泊まっていた。飯盒をしょって兵さんと同じような格好で来た。ドラム缶を切った中に飯盒をかけて、ご飯を炊いていた。ドラム缶で作ったお風呂に入っていたが、すぐ汚れ泥より汚くなっていた。庭の隅を流れる小さな溝で足だけ入れて洗っていた。

家の畑が公会堂の側のいちだんと高くなった所だったので、畑仕事の手伝いをしながら公会堂の様子がよく見えた。鞭でたたかれる音と、泣き声がよく聞こえた。言葉は違うが泣く時は日本人と皆同じだった。かわいそうだった。親は「見ちゃいかん」と言うが見てしまった。日本人の将校みたいな人がたたいていた。勤務隊の子が、公会堂よりちょっと離れた所のおばさんに「腹が減ったので何か食べさせて」と頼んだ。おにぎりを食べさせてあげた。それがばれて中学生ぐらいの小さな子がたたかれて、たたかれて。そんなことがあるので、助けることもできなかった。

##### ②芋を植えていた

わが家には偉い人がきて泊まった。しゃれた格好をしているが白いシラミをたくさんつけてきて、たちまちうち中シラミだらけになった。幸い当時は牛乳屋だったので、ボイラーに入れて服を消毒してシラミはとれた。公会堂の側の道を通る時はちょこちょこしゃべって仲良しになった。小さな声で「アリラン」など国の歌を歌っていた。農耕隊の人は、山の上の方で松の木を切り倒して、松の根っこから油をとっていた。そこに芋を植えた。畝を作ってきちんと植えるのでなくばらばらだった。

##### ③大きな声で歌った

戦争が終わり国に帰るときは、トラックの荷台に全員が乗って、ほんとうに嬉しそうな顔で大きな声で「アリラン」などを歌っていた。木炭で動くトラックで エンジンがかからず大変だった。日頃あまり近寄らない村の人たちも、トラックの傍まで来て総出で見送った。植えられた芋は部落で許可が出て、みんなで取りに行き行って食べた。（「謎の農耕勤務隊」 47. 48ページ参照）

#### 2. わたしの戦中戦後

##### ①朝鮮部落があった

「日本増埒（るつぼ）」で亜炭（あたん）を掘る仕事をしていた。井戸のような穴を掘って地下では四方に道を掘っていた。今でも駅の近くの道より下に穴がある。住まいは初めはむしろをかけただけの粗末な、家とは言えないようなものだったが、だんだん家らしいところに住んだ。お金稼ぎに来ていたと思う。子どもとは仲良しになりよく遊んだ。お正月や結婚式など朝鮮の祝い事にもよばれた。お正月にシーソー遊びをしたことを思い出す。終戦になり「うれしい」と帰国したが、舞鶴港を出た所で船が沈んで全員だめだったと聞いた。

##### ②食料はなくひもじかった

麦だらけでらっきょうの入った雑炊が、どうしても食べられなかった。腹が減って減って。すると「わらびの根っこを取ってこい。パンを焼いてやる。」というので取りに行った。しかし力が無いので、ふた足歩いてはペタンという状態で、はいつくばって根っこを取ってパンを焼いてもらった。こんな田舎にいても、助けてもらうことはできなかった。ひもじい思いをした。

戦後も食べ物ほんとうに無かった。お母さんについて兄と3人で滝の方へ買い出しに行った。物と食べ物と交換するが、だんだん農家の人たちも上から目線で、欲しいものを言うようになった。おばあさんの着物と帯でかぼちゃととうがんだけとか、茶箆筒がほしいとか。

### 3、今思うこと

・後になって、だんだん戦争の恐ろしさが分かってきた。母の弟（伊保原に住んでいた）が中学生だった時志願兵となり、挨拶に我が家に来た。祖母や両親は見送るまでは「がんばってこい」と言っていたが、部屋に入ると「帰って来れるかなあ」と言って泣いていた。その姿をよう忘れん。その叔父は戦死してしまった。戦争はいけないと思う。

・自分だけが幸せになりゃいいという考えはいけない。人が平等に。自分がほしいと思っても、ちょっと譲り合えばいい。優しい心がほしい。日本はもう絶対に戦争はしないと確信している。

## Ⅲ、 農耕勤務隊と若者に伝えたいこと

**梅村善孝さん**      **81歳**      **井上町在住**  
**終戦時**      **旧制中学2年生**

（「謎の農耕勤務隊」P. 22に掲載されている証言者のお一人）



### 1、『農耕勤務隊』について

私の家は御船（現豊田市御船町）で、家の裏に御船公会堂があって、そこに農耕隊が宿泊していたので、朝夕の登下校時には農耕隊の隊員の顔を見かけた。日中に彼らがどういうことをやっていたかは見たことがないので知らない。私の父はととも面倒見の良い人で、農耕隊員の世話もしていたので、父が生きていればもっと詳しい話をしてあげられたでしょうが。

農耕隊員が朝鮮人で構成されていることは、父から聞いていたのでそれと知ったが、外見だけでは、日本人か朝鮮人であるかは判断できなかった。農耕隊員が朝鮮から来た人々で編成されていたが、何とんでも軍隊ですから、礼儀正しく、規律統制もとれていたもので、あまり悪い印象はない。

まわりの人々もこんな田舎へ来て、食糧増産のため力を尽くしてくれている兵隊さんだということで、粗末に扱ってはいけないと、大切に扱っていた。ある人の話によると、脱走した兵隊がいたが、地理的にも不案内だし、逃げて頼るべき人もいないということで、かくまってあげたという。しかし、女の子のいる家庭では、粗相があつてはいけないと警戒していたのは、親からすれば無理からぬことだ。

規律が保たれている背景には、厳しい軍律があった。日本人に対しても厳しかったのだから、ましてや当時は異国人には民族的偏見があったので、その統制はさらに厳しいものであったろう。また訓練も充分せず戦争の実践現場へはおいそれとは参加させるわけにはいかない朝鮮人兵は、日本へ連れてきて、農耕隊員として利用するほかになかったのだろう。なおかつ厳しい統制化に置いておかなければ、軍の規律は保てなかったのだろうということは、中学生になっていた私にも充分判断できた。

農耕隊の指揮官はもちろん日本兵で、伍長とか軍曹だとかいう位の軍人で、彼らは隊員とは別の民家に寝泊りしていた。食べ物は、隊員が膳にのせて運んだ。農耕隊が宿泊していたのは、私が知っているだけでも、御船公会堂のほか、山屋敷公会堂、込行（こむぎょう）公会堂、浄厳寺、今の運動公園になっているところなどがあつた。

農耕隊員は農作業を終えると、夏には毎日ではなかったが、川へ行き、川の水で汗を流している姿を見かけた。

### 2、若者に伝えたいこと

「どのようなことがあっても戦争をしない」という信念を持ちつつ、冷静に物事の本質を見抜き、解決の道を探るといふ、粘り強い態度を培っていくことが必要だ。私は自分の子どもに「おまえの子が、将来戦争に行かなければならなくなるような政党や政治家にだけは絶対に投票してはいけない」と常々言っている。



## IV 戦争体験と農耕勤務隊

梅村季久(すえひさ)さん 77歳 西中山町在住

終戦時 国民学校3年生

(「謎の農耕勤務隊」P. 59に掲載されている証言者のお一人)

### 1. おやじの戦争体験

#### (1) 出征

昭和18年6月頃、ぼくが国民学校1年の時に召集令状がきた。お宮さんで見送りをしてから、419号線の沿道に区民みんな並んで「万歳、万歳」で送った。名古屋の県庁のところに第3師団本部があって、最後の面会に行った。軍の秘密で知らされないが、たぶんロシアとの国境に近い満州牡丹江省へ行くだろうという記憶がある。おやじは近衛師団にいたので、当時の写真がたくさん残っている。小学校の1年生だったから、おやじが召集された時にどんな気持ちだったか、あんまり記憶に残っていない。しばらくしてハルピンに移動したが、日ソ戦争が始まって捕虜としてシベリアのイルクーツク州に2年いたと言っていた。(抑留生活)

#### (2) 帰還

おやじが帰って来るといふ、毎日引き揚げ者名簿の付いた新聞を見ていた。行方は全く分からなかったが、死んだとは思わなかった。おやじが帰ってきた日は、たぶん一生忘れられん。永祿丸に乗って舞鶴に着いて、1週間後の5月30日夜中の12時頃急に帰って来た。体力がなくなってふらふらしていた。

すぐマッカーサー司令部から呼び出しがあり、東京で事情聴取(どこにおったかとか、どういう仕事をしていたかなど)を受けた。夏の靴が履けないうらい体がぼんぼんに腫れていた。栄養失調で帰ってきて、6~7年は医者通いをしていた。

### 2. ぼくとおふくろたちの戦争体験

#### (1) 空襲

この辺は、毎日のように空襲があった。中山小では2つの防空壕が掘ってあって、学校で空襲警報が発令されると、100人足らずが入るようにしていた。溝に伏さる訓練もしたが、本当に西から低空飛行の戦闘機が来て、すぐ畑の溝に伏せた。

この辺で亡くなった人は聞いていないが、爆弾が落ちたのは緑化センター近くの田んぼから山にかけてで、だいぶ落ちたらしい。次の朝大人について見に行ったら、大きな穴があいていて、爆弾の破片がたくさん落ちていた。B29が編隊を組んで飛んでいたが、1機だけ主翼から火が出て墜落していくのを見た。1月3日だったか、松平へ墜落したことが後日分かった。伊保原飛行場がひどく攻撃されたのも見た。艦載機が上を旋回しておって、急降下していくのを見た。怖くて布団を被った。岡崎が赤くなって燃えていたのも、よく見た。

#### (2) おふくろとおばあさん

毎日おやじの写真の前に陰膳を供えていたが、なかなか帰って来なかった。おふくろは口には出さなかったが、大変だったろうと思う。おじさん(おやじの弟)が21歳で、揚子江で亡くなった時、

おばあさんは気が狂わんばかりに泣いておった。入隊して1ヶ月だった。その遺品が去年林宗寺で出た。骨壺の中に、遺髪や爪が残っていて梅村道夫と印してあった。

### 3. 農耕勤務隊について

#### (1) 日常の様子

西中山町下切（当時）の公会堂に農耕隊の人たちがいて、軍服というより作業服のようなものを着ていた。日本兵の幹部（軍曹くらいから下）は6人くらいだったと思う。公会堂の近くに井戸小屋があって、農耕隊の人たちは陰になるから利用していた。ドラム缶の風呂に入っているのをよく見た。

いつもおなかがすいていたと思う。柿や桃を取って食べていた。よく来るのは金川甲山（かねかわこうざんという日本名をつけられていた）という人だったが、盗み食いを見ても怖くてよう言えなかった。おじいさんも、自分の息子も（戦地に）行っているからか何も言わなかった。危害を加えるようなことはなかったねえ。夕方になると勝手口に来て何か欲しいと言うので、おばあさんが焦げ飯のおにぎりを握ってあげていた。「分かれると叱られるで、こっそり食べて行きんよ。」と渡していた。叱られる現場も見た。

ここから猿投や御船に（仕事をしに）出て行ったと思う。朝早く、日本兵に見張られて出て行って、軍歌を歌いながら帰って来た。何をしに来たかは分からなかったが、鍬を担いでいるのを見ると、食料難だから開墾して芋を作るんだらうなあとと思った。

#### (2) 終戦

終戦になって、ぼくの家の8畳2間がいっぱいになるほどの人が大宴会をやって、帰っていった。どこかで肉を調達してきて、ぼくも一緒になって食べた。おいしかったですよ。おふくろやおじいさんは朝鮮の人に親切にしていた、憎しみはなかったと思う。



《残された葉きょう》

#### (3) 証拠隠滅

農耕隊のことで、戦後の開拓誌に載っていたのは三好町だけで、それもちらっと。猿投町誌や藤岡町誌には全く載っていない。ぼくの想像だけけど、戦争が終わったと同時に燃やしてしまった。歴史は「証拠がないから」と言って証拠隠滅し、間違ったことを正当化していくことがちょいちょいある。「従軍慰安婦」もそうだね。

### 4. ぼくの戦後と今

#### (1) 今のぼくがあるのは…

おやじが帰って来たから、今のぼくがあるかもしれん。それでも体が弱かったもんで、兄がおやじ代わりをしてくれた。金がなくて高校へは行けんと思っと思ったが、おやじが校長さんに勧められて、歩いて通える猿投農林高校に行った。その後定年まで高校の教師を勤め、65歳まで働いた。地域のことと言うと、人権擁護委員をずっとやって来て、この3月で終わりです。

#### (2) 戦争のない社会を

人権に関わるようになって強く感じたのは、いかに平和が大事かということ。戦争のない社会を、どうやってつくっていくかということですよ。体験を通してぼくが今思うことは、今の若い人に歴史を教えることが最も大事なことだという気がする。日本とアメリカがどんな戦争をしたかとか、日本と韓国はこういう関係だったとかね。日本人の悪い癖で、水に流してはいけないこともある。

高校の教科書もいろいろあって、『『一般市民の自決はない』と軍は言っている』という教科書もあるが、事実は違う。市民に手榴弾を渡すことは、いかんという時は自分で死になさいという命令になる。戦争は起こる要因があって起こった。食い止めようとする人もいた。だけどどんどんエスカレートしていった。子どもにも、ぼくの体験を話している。孫にもいい社会が来るようにと思っている。

## V. 戦後の朝鮮人とのかかわりと今の思い

雨宮恵一さん

65歳 御船町在住

雨宮 剛さんの甥



### (1) おやじの戦争体験

おやじは昭和19年の秋に召集されて、秋に朝鮮半島経由で中国中南部の徐州に行った。司令部付きの暗号班にいたから、前線には出ないですんだ。戦争の話はあまりしなかったが、時々夜中に「わあ」と大声で叫ぶことがあった。新兵訓練のとき、銃剣で中国人捕虜を刺したことが悪夢になっていたのかもしれない。

「慰安婦が時々トラックでやってきた。兵隊たちは一人ひとり『突撃一番』(性病予防のサック)を支給され、テントの前に列を作って順番を待った。将校には、着物を着た日本人の娼婦が相手をした。軍隊に慰安婦はいなかったなどということは絶対はない。証言してもいい。」と話していた。(恵一さんのお父さん、園男さんは最近亡くなりました。)

### (2) 叔父(雨宮 剛さん)のこと

叔父がなぜ「謎の農耕勤務隊」の本を書いたのか。いちばんの理由は、少年のころ見た朝鮮人農耕隊の強烈な印象が、七十年間頭を離れなかったことだと思う。それに祖母が保育園を始める際、YMC Aから世界の若者がやってきて、整地作業を手伝ってくれたことも。叔父はその国際キャンプで英語に出会い、青山学院に進み、日本人(特にキリスト者)の戦争責任や国際理解と和解をライフワークに研究、実践活動をしている。

### (3) 農耕勤務隊、朝鮮人の記憶

戦争末期、朝鮮でも徴兵が始まり、体格の良い屈強な若者は最前線に。戦争の役に立たないひ弱な少年を日本に連れてきて、食料増産の開墾作業に使ったのだと思う。兵隊というより農奴だった。脱走事件や引率の兵隊による虐待や苛烈な制裁もあったそうだ。

終戦で農耕隊は帰ったが、御船には多くの朝鮮、韓国人が住んでいた。木節粘土と亜炭の鉱山があったためだ。そこは同じ御船なのに、山の神という別の自治区で変だった。

山の神の子供たちは、私たちとは違う西広瀬小に通った。中学校は同じ猿投南部中学だった。同じ学年に二、三十人、一クラスに四、五人の在日韓国人、朝鮮人がいた。仲の良い友達もいたが、差別はあった。北朝鮮に帰った級友も数人いた。

### (4) 今、思うこと、教師の責任

安倍首相が、日本を戦争ができる国にしようとしている。戦争は絶対にやってはいけない。負けるが勝ちだ。愛国心とか愛国教育は危険だ。戦時中、学校の先生は教え子を戦場に送り出し、満蒙開拓に狩り出し、神風特攻に志願させた。その責任を今も取っていない。

いちばんの責任は、戦争の記録を墨で塗りつぶし、燃やして灰にしてしまったこと。どこの学校の沿革史にも、終戦間際の大変な時期の記録が抜け落ちている。たった七十年前の歴史が今消えかけているのに、だれも調査や発掘をしない。また、それをしようとすると、非協力どころか、妨害する行政や教育関係者がいる。これは歴史に対する犯罪行為だ。

## VI. 捕虜収容施設 広濟寺

加納俊治さん（85歳） 啓子さん（78歳） ご夫妻 下仁木町在住

広済寺 住職 酒井泰俊さん（55歳） 和子さん（80歳）

東広瀬町在住



### イタリア人一家との思い出 当時9歳の私（啓子さん）

**\* フォスコさん一家とフレンドリーに** お寺には15人のイタリア人がいました。メンバーは5人家族（子供3人）とあとは独り者や夫婦でした。昭和19年名古屋空爆が始まったため、名古屋の松坂屋天白寮から私のお寺に疎開し、「愛知抑留所」となりました。なぜ、広済寺が捕虜収容施設になったかはわかりません。5人家族のご主人はフォスコ・マラーニさんと言って、文化人類学者であり登山家、写真家でした。チベット文化に詳しく、アイヌ文化も研究されました。一番上のお子さんはダーチャさんといい、私と同じ9歳の女の子でした。ちょうど同年だったこともあり、仲よくなりました。その下に5才と3才のお子さんがいました。

フォスコさんはずっとお寺にいて、お子さんたちと歌を歌ったり勉強を教えたりしていたので、私もその中に入れてもらい、よく遊びました。兄や姉は敵国の人であり、「イタ公」と呼んで、替え歌を歌ってからかうようなこともありました。私は幼く、日頃親しくしているので、いやな感情は全くありませんでした。遊べるのが嬉しくて、とてもフレンドリーな間柄になりました。私の父は教師、母は11人家族の家事や畑仕事で忙しく昼間私の相手をする暇はなかったと思います。それで毎日遊んでくれるイタリア人のお父さんお母さんが大好きになりました。自分の子どもと同じように愛してくださいました。良く絵を描かれ、私のスケッチもしてくださいました。「フォスコさんは絵描きさんではありません。いつ殺されるかもしれない恐怖から精神を落ち着かせるしかない、そのために絵を描くことに集中するしかなかったそうです。」（俊治さん）



フォスコさんのスケッチ  
左隅に啓子さんにあげると記されている。（原画 広済寺蔵）

### \* 食べ物不足と見張られる生活

4人の警察官がいつもいて、イタリア人を見張っていました。（注：軍部の管理下に置かれていた）父たち大人はイタリア人には近づけませんでしたが。スパイと間違えられそうで。

食べるものが無く苦勞していました。私のおじいさんは自然が好きな人で、桜や梅の木を植えて、その花の下で村の人達と楽しむという人でした。木の周りには蓮華やたんぽぽが生えていましたが、それも食べていました。ヘビイチゴも畑の作物も。いろいろ生で食べていました。境内の池の鯉もカメも食べられてしまいました。カエル、ヘビも食べていました。

お子さんの食べ物には困って見えませんでした。奥さんが大人から一匙ずつもらって、子どもさんに食べさせていたのを見ました。軍から子ども達に1匹の山羊が与えられていました。子どものミルクがわりだったと思います。小麦粉でシチューのようなものを作り中にワングシの赤い実を入れてきれいなので、食べたいなあと



（寺院裏の広い池）

後になって、娘さんからシークレットだよと話してもらったことがあります。「夜にお父さんと農家に出かけ養蚕の手伝い（「すきむし」を選ぶ作業）をし、農家の方たちも親切で、キナウリやさつま芋をもらって帰った。」と。

### \* フォスコさんの日本人への理解



おばあさん（まささん）は毎朝本堂にお供えをするお仏供さんを3人のお子さんが食べるのを、見て見ぬふりをしていました。そのことをフォスコさんは「お寺には慈悲の心が分かる人が住んでいた」と言われました。「慈悲」という言葉を使われるように日本人のことがよく分かっていました。軍国主義の人はいけないがそれ以外

鐘は供出でない。(広済寺蔵)

外の日本人はすばらしいと言われました。

### \* 8月15日のこと

玉音放送は暗い部屋でじいっとして聞いたが、何かなと思いました。夜になり、お寺の裏の木にたくさんの旗が飾られて、イタリアの人達はたき火を囲んでダンスをしていました。それまで、いやな光景を見てきたので、イタリアの人が喜んでみえて良かったなあと思いました。悲しまない明るい生活、そんな生活が来るだろうと思いました。ダーチャさんがとても喜んでいたのが印象に残っています。

### \* 終戦直後 救援物資が届く

終戦直後に連合軍が救援物資をパラシュートで投下しました。15人しかいないのに100人分の物資をドラム缶につめて落としました。食べ物だけでなく、靴下、靴、シャツ、バスタオルなど。寺の裏山で旗をふって知らせていましたが、うまく落ちないで大きな松の木に引っかかったのもありました。

その時のパラシュートの一部がお寺に残されています。また、その折のドラム缶（いたんでないドラム缶）を小原がもらい受けて、和紙の原料の楮（こうぞ）を煮る器に使っていました。



パラシュートの紐を手にする住職。日本だけ2回も原爆を受けた。戦争の事実は語り伝えねばならないと思う。

### \* 突然の別れ 想い続けて

ある日学校から帰ると本堂はもぬけのからになっていました。挙母



紐は丈夫で、村の人も稲束を縛るのにも使いました。(和子さん)

の方へ買い物にいかれたのかなあと待っていました。待っても待っても帰って来ないのでとても寂しかった。夜お月様を見ながら、イタリアの歌を歌い一家はどうしているのだろうか会いたいと思いました。結婚のときは嫁入り道具にフォスコさんの写真、パラシュート

のひも、バスタオルを持ってきています。

### \* 今、思うこと

フォスコ先生は「世界はみんな兄弟だ」とメッセージを送られています。言われる通り、世界中みな兄弟。戦争はしないで。

### ずっと今も続く交流

- ・1988年（昭和63年）4月10日、43年ぶりに劇的な再会。
- ・豊田市で写真展が開かれた（1989年）
- ・2004年6月8日亡くなる。
- ・啓子さんのお寺の裏山で眠りたいと言われ、後日、遺髪と爪が届き、先代住職とその兄弟一同でお墓をたてた。墓石には「私の天体月に帰ります。そして争いのないメッセージを地球に贈ります。」と刻まれている。

